講演概要

「つながりを生む文化芸術～認知症、パーキンソン病と演劇・ダンス」

古賀 弥生（研究所文化芸術部門文化的処方研究室主任研究員）芸術文化観光専門職大学
芸術文化・観光学部長　教授）

演劇やダンスなどの文化芸術は、一部の愛好家のためだけのものではありません。人と人とのつながりを生み出し、社会の課題を解決する糸口をみつける作用もあります。

この講演では、講師が約 20 年間、福岡で取り組んできたアーティストによる高齢者とのワークショップの事例を中心にお話しました。認知症の方との演劇活動では、アーティストが投げかけた言葉から想像力を羽ばたかせ、昔の記憶を蘇らせながら生き生きと語る様子が見られ、ダンスの活動でも車椅子に座ったまま全身で表現する姿が印象的でした。患者本人はこの時のことをすぐに忘れてしまうかもしれませんが、その瞬間のきらめきは大切な生きた証です。また、介護する人がその様子を見ることで介護される人との関係性が変わっていきます。

福岡でのパーキンソン病患者のダンス活動では、不自由な身体でものびのびと踊り、仲間との交流を心から楽しむ場が形成されていました。高齢化が進む但馬地域では約 200 人のパーキンソン病患者がいますが、患者同士のつながりや早期のリハビリが必ずしもできていないなどの課題があるといわれています。そこで、福岡で展開していたダンス活動を「豊岡でパーキンソン病と暮らす方の交流会」として開始しました。豊岡健康福祉事務所、当地で活動する一般社団法人ダンストークとの連携により、継続的なダンスと交流の場を社会資源として根付かせる試みです。

紹介した事例のような文化芸術が高齢者にもたらすものについては、研究成果としてさまざまな形で公表されています。病気そのものの治療に直結しなくても周辺症状の緩和など QOL（生活の質）向上につながるといわれ、身体だけでなく心の健康やコミュニケーション・社会参加の促進、自信・自尊心に働きかける効果があります。

イギリスでは、このような文化芸術の力を社会的処方の一環としてとりいれ、心身の苦痛を抱える人々が、地域社会の芸術活動に関わるよう促す取り組みが進められており、これを芸術的処方あるいは文化的処方と呼んでいます。養父でも、さまざまな文化資源を活かして文化的処方に取り組んでまいりましょう。